平成元年度(1989)

個展を前提とした作品制作研究(7)

第7回個展・茶絵羅　in　Naha

金城　満

１．展覧会名：

金城満個展

２．趣旨：

形を自由に変化させた画面から、ストロークが自在に飛び出し、画面の内と外との関係性をテーマにしている。それはまた、壊す形と繋がる形でもある。

３．材料技法

発泡スチロールに綿布、石膏地、テンペラ、油彩、箔

４．展覧会場

アートギャラリー茶絵羅

５．展覧会期

1989年11月07日（金）～19日（水）　※13日間

６．開館時間

11：00～20：00

７．観覧料金

無料

８．企画

アートギャラリー茶絵羅

９．作品リスト

No.	作　品　名	サイズ（ｃｍ）	材　　料	制作年月	備　考
108	カレンダー	45.0 x 37.0 cm	6	1989 年	第 7 回個展
109	くるくるサイクル	36.0 x 85.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
110	うきうきブギウギ	45.0 x 37.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
111	クロス・ワード	70.0 x 100.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
112	ス　コ　ア	42.0 x 42.0 x 42.0cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
113	四　捨　五　入	42.0 x 42.0 x 42.0cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
114	ノスタルジー	110.0 x 116.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	同時期、あけみお展金賞受賞
115	ボクは昔そこにいた	125.0 x 125.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
116	向　上　心	65.5 x 45.5 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
117	彼女が手のひらをかえす時	63.5 x 59.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
118	没　個　性	30.0 x 60.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展
119	月　　食	42.5 x 30.0 cm	発泡スチロールに綿布、石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 7 回個展

10. 関連イベント

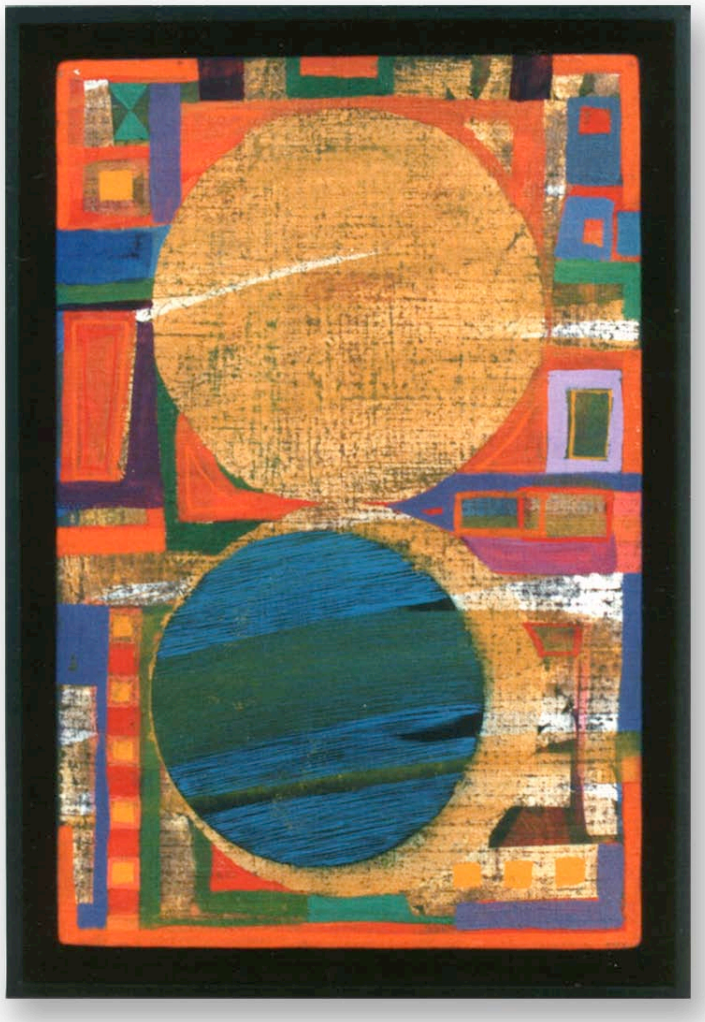
11. 考察（報道等資料）（pp. 13-15）

⑴沖縄タイムス 1989. 11. 10　展覧会紹介

⑵沖縄タイムス 1989. 11. 11　展評/金城満展に寄せて
（沖縄県立高校教諭／翁長直樹）

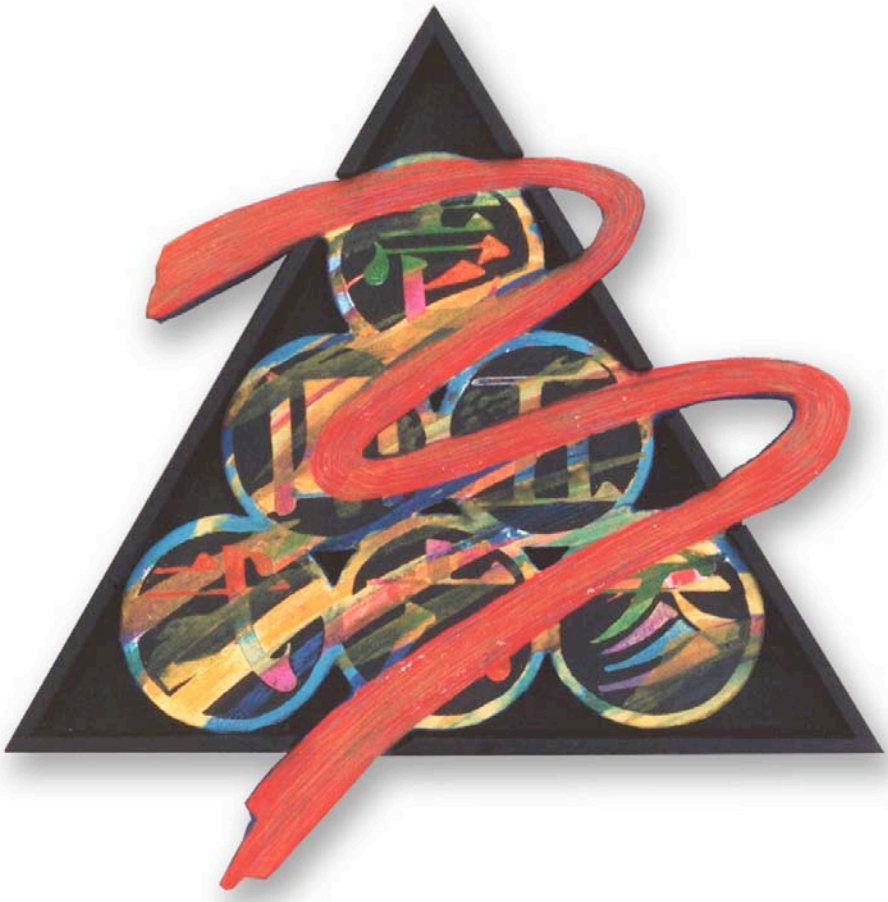
⑶沖縄タイムス 1989. 12. 12　11 月美術月評

牧志局
料金別納
郵便
POST CARD
ART GALLERY Ca.et.la 第88回企画
金城　満展
1989年11月7日〜11月19日 AM11:00〜PM8:00
〒902 那覇市安里2−4−17
ライオンズマンション1F
Phone (0988)63−4257
Fax (0988)62−1435
ART GALLERY Ca.et.la
くるくるサイクル
テンペラ・油彩
36cm×85cm
金城　満



月　　食
42.5 × 30.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

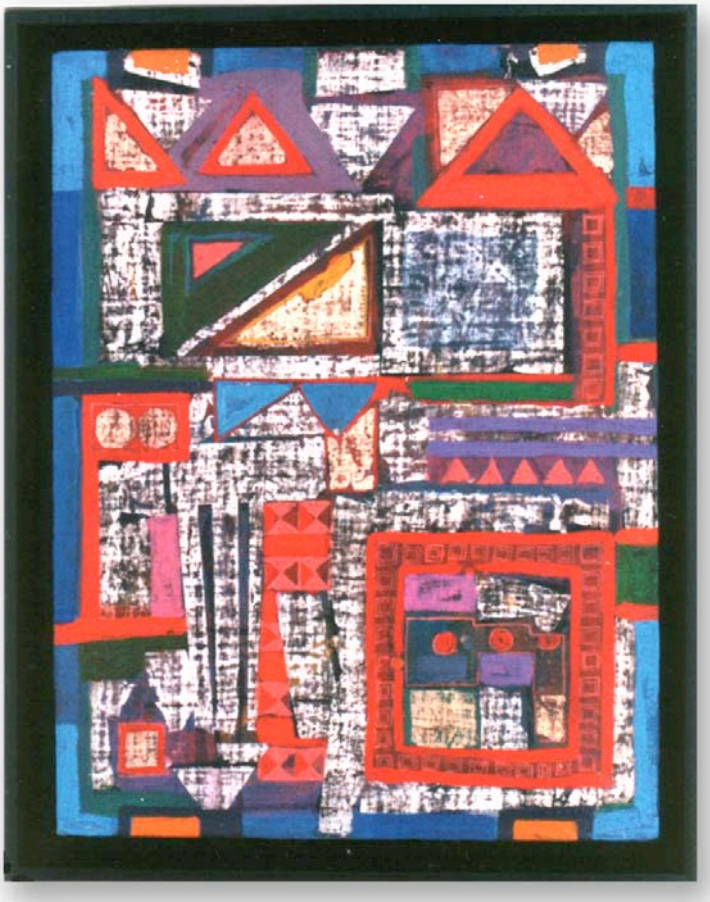
没　個　性
30.0 × 60.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔



四　捨　五　入
42.0　× 42.0 × 42.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

ス　コ　ア
42.0　× 42.0 × 42.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

カレンダー
45.0 × 37.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔



うきうきブギウギ
45.0 × 37.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

くるくるサイクル
36.0 × 85.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

彼女が手のひらをかえす時
63.5 × 59.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

向　上　心
65.5 × 45.5cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

ノスタルジー
110.0 ×116.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

ボクは昔そこにいた
125.0×125.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

クロス・ワ−ド
70.0 × 100.0cm　1989年
発泡スチロ−ルに綿布、石膏地、
テンペラ、油彩、箔

沖縄タイムス

平成03（1989）年11月10日

展覧会から

混とんから秩序へ向かう

混とんの中から出てきた色彩や形相、それは既成の秩序を惑わしながら、新たな秩序へと向かう。不協音を響かせ、その「きしみ」をエネルギーに、凝縮と拡散を繰り返し画面に絡みとっていく。画家の営為とは何か。真しでひたむきな「絵画する」二人の作品展が開かれている。

喜久村徳男絵画展（ギャラリー・ミヤギ、六日～十二日）

人体のフォルムに苦悩、かっとう、不安、あこがれ、喜びの諸相を融合させ、一極を見つめる姿態を描く。一貫して追い続けているテーマで、フォルムはぎこちなく、どこかやるせない。たたずみ、張りつめ、彷徨（ほうこう）を繰り返す魂を暗示させる。

喜久村徳男作品

展示作品は二十六点。青を基調色にしているが、最近作は白っぽい画面を展開。これまでになかった柔らかな線も、遠慮がちに弾んでいる。画面の周辺に漂っている混とんの様相も白、あるいは黄土を含んだ白で抑さえられ、幽閉されていた青の世界が、いきなり白日下に置かれたような印象も。

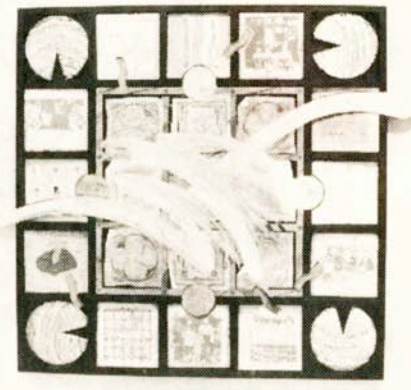
固着から律動へ。指で線を描き、紙で面を塗る作業を混在させた腐心の跡が画面からうかがえる。内へ凝縮していたエネルギーが、外へ向かい始めているようにも思われる。それを解放とみるか、弛（し）緩とみるか。具象と抽象のはざまから新たな展開を予期させている。

金城満展（ギャラリー沙絵羅、六日～十二日）

絵画の常識を踏まえながら、常識を破っていく。それをどう表現するのか。日常性からは得られない物質や意識のズレを通して、実験を試みている刺激的な作品展。かなり、しんどい仕事を背負いながら、作品は意表を突いた即興性、ユーモアのセンスが点在している。

素材は発泡スチロール、紙、テンペラ、油彩。作品は「混とんの中から出てきた面、線を瞬間的にすくい取って造形化した」といい、エスキスなしで画面化。「虹のおとしご」で絵画の枠を取り払い、「くるくるサイクル」で枠を破壊する。

自分でもとらえることのできない奥底から発生するエネルギーが、奔放に画面を分断。物質と自我とのかっとうを展開させながら、コレクターのように作品を標本箱に収めている。



金城　満作品

沖縄タイムス
平成01（1989）年11月11日

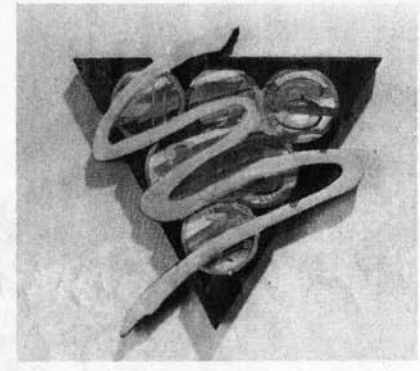
美術

金城満展に寄せて

翁長 直樹

今年二月の個展から八カ月余、金城満はかなりの速度で仕事をしているようだ。金城の作品からは、いつも作品作りが楽しくてしょうがない、「美術大好き少年」といった風情が窺える。今回の展示会が二月と異なるところは、作品を縁どっていた黒い枠が徐々に取れ、変化してきたことである。もうひとつは、グリッドの中に納まっていた諸々のモチーフが動き始め、額縁をはみ出して疾走するプラッシュストロークの実験的試みがより自由になり、枠も三角形になったり、キャンバスも縁なしのシェイプトキャンバスであったり、かなり自由自在な仕事ぶりに見えることであろう。

しかし、いかにもあっけらかんと自由奔放であるかのように見える金城の作風であるが、一歩踏み込んでみると彼の中の制度や社会の諸々の制度に対する拮抗といったメタファーが読みとれるのである。今回はっきりと図式的なまでに作品化したのが「没個性」である。黒い縁の中に同じように扇形に欠けたレリーフ状の黒い四個の円が、それぞれ正方形の上に鎮座している。それは管理社会の中で管理されている意識もなく〝個性〟を主張している我々の姿であろうか。表現者にとって社会は常に大きくのしかかってくる外圧であり、桎梏（しっこく）である。そのことをどのように作品に置き直すか、はずすかあるいはずらすかは作家の力量となってこようが、できるであろうか。



金城満作品

英語のEXPRESSIONとは外圧に対してギリギリにこらえた力が一気に爆発する意味を含んで、そのような意識のない表現者は表現する資格もないといえよう。モダニスム的作家においては作品とは、そのような格闘をも見せてしまう場であったのに対して、ポストモダニスムにおいては、巧妙にすり抜けるか、軽やかに境界を飛び越したかのような身ぶりをする。それは飽くまでも「身ぶり」である。

金城においては感覚を常に開放し、形や色彩が現れるのを待つため、言葉にさえ捉われたくないという彼一流の「筋書はずし」的パフォーマンスを日常的に実践する。それは内部においては、たぶん絶えざる制度との格闘である。

さて今回、境界（額縁）を飛び越して行った足跡（「向上心」）は一体どこまで続いていくのであろうか。視線はある一定の限界（枠）なしでも作品を追いかけて行くことができるであろうか。

（高校教諭）

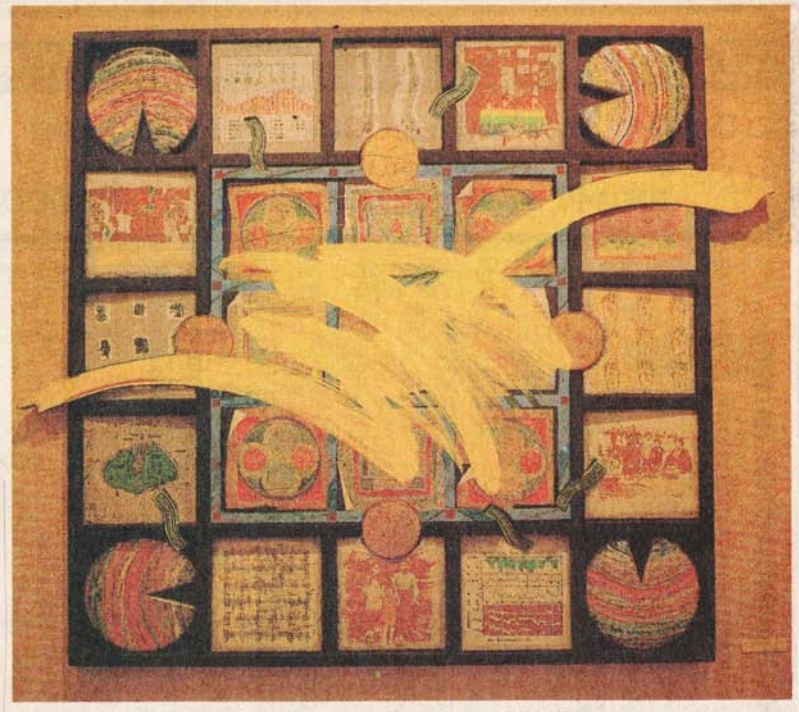
沖縄タイムス

平成01（1989）年12月12日

美術月評

11月

ギャラリー茶絵羅の金城満展は日常のかかわりや、内的世界から生じるイメージの寄せ集めを多様な表現を駆使しながら作品化している。自由な遊びから生みだされるイメージの増殖と、それを巧みにコントロールするセンスの良さは魅力ある作品造りとなっている。じょう舌になりやすい世界を引き締めているあたりはさすがといえよう。



「ホクは昔そこにいた」　金城満